

## 文献案内

公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会編『郡山城絵図集―江戸時代の郡山城を読みとく―』（同会、二〇二二年二月）

本書は江戸時代前期から明治時代初期までの大和国郡山城の城絵図、および建築指図を集めたものである。郡山城は高取城・宇陀松山城とともに大和三城の一つに数えられるが、江戸幕府の大和支配を考える上では最も重要な城郭であり、その城下町も奈良に比肩する規模に発展した。歴代の城主は徳川家康の外孫である松平忠明や幕府の厚い譜代大名が勤めた。本書には正保二年（一六四五）に幕府の命により提出された国立公文書館所蔵「和州郡山城絵図」（正保城絵図）をはじめとして、計五一点が収録される。

全体は第一部「郡山城図」と第二部「解説編」に分かれ、さらに第一部はそれぞれの絵図の性格に基づいて、第一章「城図・家中図」、第二章「修復絵図」、第三章「軍学と城図」、第四章「指図」に分かれている。中心となるのは各城主の時代に作成された二六点を収録した第一章で、一点ごとの解説では、それぞれの絵図の侍屋敷地や寺社地・町人地の書き込みなどから作成年代が詳しく考証されており、郡山城および城下町の変遷を窺い知ることができる。第二章は幕府に城郭の修復許可を願った際に作成された絵図七点を集めたもので、破損箇所や破損の程度が描かれる。特に慶応元年の修復に際する絵図は、幕府に提出された清絵図（国立公文書館所蔵）、その控えとして城主柳沢家に残された写本（柳沢文庫所蔵）がともに現存する。第三章は軍学のために作成された絵図九点を収録する。多くは模式的に抽象化されたものであるところに特徴があり、城主家以外の大名家にも伝わっている。第四章は城主家もしくは旧家臣家に伝わった城内の殿舎などの建築指図九点を収録する。第一部に収録される絵図一点ごとの解説に加え、第二部には歴代城主や郡山城の概要などについて解説が付され、絵図の理解を助ける。江戸時代の郡山城およびその城下町の基本史料集として活用できる。

なお本書に関連して、柳沢文庫企画展「絵図集刊行記念 江戸時代の郡山城を読みとく」（二〇二二年五月二日～八月二日）が開催された。（及川亘）

竹崎宏基「松江藩家老・乙部家旧蔵絵画をめぐる諸問題―木挽町狩野家との関わりと「乙部仕立」を中心に―」（『松江歴史館研究紀要』一〇号、松江歴史館、二〇二二年三月）

同「ボストン美術館所蔵の松江藩家老・乙部家旧蔵絵画、その伝来と特質―伝銭選「山茶花図」と伝徐熙「雪柳鷺図」を中心に―」（『松江市史研究』一三三号、松江市歴史叢書一五、松江市歴史まちづくり部史料調査課、二〇二二年三月）

村角紀子氏による乙部家「御道具帳」原本の紹介（『松江市史研究』一二、二〇二一年）により、優れた中国絵画コレクションが十代可時（一八二四～八七）によって形成されていたことが再注目されている。標題の二本の論文は、各地に現存する旧蔵品に即して詳しく検討を加えるものである。

前者では、幕末・明治初年に寺社・大名・御用絵師が重宝を手放さざるを得なくなり、可時が入手できたことを伝来から推察する。維新直後の事例にも留意されよう。可時蒐集品に鑑蔵印などはないが、独特の収納形式は「乙部仕立」と称された。内箱を更紗の帙で覆い、桐の外箱に収め、外箱の底には極箱が嵌められる。主家の雲州松平家や広島藩浅野家の作法に想を得、後には模倣される。狩野派とくに木挽町家の鑑定を多く伴い、その鑑識を重視して入手し、持ち込んで鑑定を依頼した。可時の収集は、弘化二年（一八四五）に江戸勤番となった後、嘉永二年（一八四九）からの再度の江戸滞在で本格化し、明治十年（一八七七）に遺書を作成した翌年には売却が始まった。

後者では、ボストン美術館所蔵の乙部家旧蔵四点を紹介する。伝銭選「山茶花図」は、松平不昧旧蔵で「雲州蔵帳」に記載あり、完存しないが乙部仕立で、附属資料により日出藩木下家旧蔵とされる。岡倉天心により明末の写しと鑑定された。伝徐熙「雪柳鷺図」は元時代の作、附属品によりかつて乙部仕立が備わり、小浜藩酒井家が安政江戸地震により売却したもの。伝是庵「富士三保図」は近世の偽作だが乙部家の道具帳に記載される。伝狩野正信「邢和璞図」は桃山時代の作だが、近世初期には狩野派内で尊重されていた。近代以降の鑑識とともに、歴史的な評価も視野に入れる必要がある。

乙部家旧蔵の中国絵画一六五点のうち約六五五点の現存先が把握され、さらに図様などを確認できる三〇点超があると言え、個別作品の調査の積み重ねにより、コレクションの全容や消息の解明が期待される。（藤原重雄）